

『譚 たん

綴 こ

』

『女絵師 おんなえし

志乃 しの

』

九谷
六口

桜の花弁はなびらが舞い散る吾平長屋の屋下がり。前掛け姿のお鶴が小鉢を手に志乃の家に来た。

「志乃さん、いるかい」

「はい。今、開けますから」

「あんた里芋、好きだったよね。さっき煮っ転がしを作ったんだけど、お裾分けと思
ってね。なんだか味が濃いんだけど、どうか……」

「いつも済みません。お世話になってばかりで……。あら、お鶴さん、目が赤いけ
ど」

「なに言ってるのよ。いつものあれよ」

「また、お酒ですか。程々にしないと」

「いいのよ。お酒しか楽しみがないんだから。でもねえ、亭主が呑めないってのも話
まらないものよ。大工のくせに匂いだけで赤くなっちゃうんだから。棟上むねあげの日な
んか朝から渋い顔。まったく棟梁とうりょうの名前が泣くよ」

「ほほほ、八五郎はちごろうさんは真面目な旦那さんだから」

「あらっ、あたしは真面目じゃないって言うのかい」

「お鶴さんたら……」

一人は笑った。

「仕事の方はどうだい」

「はい、お陰様で淀屋さんには可愛がっていただいています」

吾平長屋は、表通りから奥まった所にある裏長屋。

路地を挟んで両側に三軒ずつが並ぶ棟割むねわり長屋だ。間口は二間。裏長屋に多い造
りになっている。いわゆる二間長屋で店賃は五百文である。

路地を入れてすぐ右側には大工の八五郎夫婦が住み、隣りが志乃の家だ。その隣だ
が今は空き家になっている。廁かわやとゴミ捨て場は、路地の一番奥にある。路地の左
側だが、まず、吉沢半次郎が住む家。半次郎は、独身の浪人である。半次郎の家は、

間口が三間の一戸建てで部屋も広い。そのため、店賃は八百文と高い。半次郎は、五年ほど前よりこの広い部屋で寺子屋を開いている。寺子は二十人ほどだが、親たちの評判も良い。

半次郎の家のすぐ隣には井戸があり、井戸端の奥にはお稲荷さんが祭つてある。井戸の隣が飾り職人松吉の家だ。そして、その奥が大家吾平の家。吾平の家は、廁の向かい側に当たる。

吾平の家は広いが、それには理由があつた。

吾平は、中途半端が嫌いな男で、何事にもきちんとしなければ気がすまない性格であり、自然、金にもうるさい。店子たなこが店賃たなちんを滞納しようものなら大変である。その店子の日々の費えにまで口を挟み、無駄な金を使わせない。だが、たまにだが店賃の工面が出来ない店子が出る事がある。今月は金がないと、店子がいくら頭を下げて、先送りは許さなかつた。

「いいかい、そう言う甘えが人間を駄目にしていくんだよ。店賃だから良いようなものだが、商あきな いったらどうするんだい。下手すりやお飯まんま が喰えなくなるじゃないか」

「へえ、しかし、金がないんで」

「じゃあ、貸そうじゃないか。その代わりに担保たんばを持っておいで」

担保は、形がある物であれば何でも良かった。夏には、火鉢や炬燵、どてらが担保になった。冬になれば簾すだれ や団扇うちわなどである。火鉢などはともかく、団扇などは担保になるものではない。しかし、吾平は担保が何であれ、高に関わらず店賃分の金を貸した。金貸しのようにだが貸す相手は店子だけ。しかも利息は取らない。理解に苦しむ所があるが、とにかく、吾平はこれで気分が落ち着くのである。つまり、家の一部屋を担保を置くために使っているため、家が広くなければ寝るところがなくなつてしまふ。

引越してきた店子たちは、口うるさい大家だと顔をしかめたが、考えてみれば自分たちのために遣つてくれること。今では店子たち全員が吾平を信頼している。

とにかく吾平はしっかりしていた。廁の使い方にもうるさい。店子たちだけでな

く、寺子屋に来る子供たちにも、便所は長屋の廁を使えと厳しく言った。近郷の百姓が定期的に糞尿ふんにょう を買いにくるからだ。

百姓たちは下肥しもひえ を作るために糞尿を買う。値段は年単位で決められるが、糞尿とは言え馬鹿にならない金額である。普通であれば、年一両ほどなのだが、吾平は高く売った。その言い草が振るっている。

「いいかい、商人あきんど たちはケチだから碌ろく なものを食わないんだよ。それに比べ、職人は宵越しの銭は持たねえと料がるからね。ほとんどを飲み食いに使っちゃう。だから出てくる糞尿も上等。ほかよりも高く買うのが道理じゃないかい」

百姓たちも吾平がしつかり者で優しい好々爺こうこうや であることを知っている。

「ようがす。特別に言い値で買いますよ」

吾平は、一両二分で売った。

志乃は一人で暮している。

両親は、早くに流行り病で逝ってしまった。その時、志乃はまだ乳飲ちのめ み子。吾平は、志乃に身寄りがなかったことを知っていた。養女にしたいと申し出た店子もあり、吾平はその方が良くとも思ったが、店子たちに訊くと、長屋の連中は皆で育てようと言い出した。そう言われれば、吾平もやぶさかではない。だが、運悪く長屋に乳が出る女は居ない。これでは乳飲み子である志乃の育てようがない。

店子の中で夫婦者はお鶴たちだけが、一緒になつたばかりで乳は出ない。思案しているとお鶴が乳の出の良い女房を見つけてきた。吾平は、長屋で志乃を育てることにした。お鶴は、いずれ自分たちにも子供が出来る。志乃に情が移っちゃいけない、と言ながらも、おしめを取り替えたりお湯に入れたりした。

志乃はすくすくと育った。

志乃の父親、勘齋かんさい は絵師であったが、これからという時に死んだ。

吾平は、志乃が物心つきだした頃、勘齋のかつての絵師仲間、玄齋げんさい の家に志乃を連れて行った。別に絵師の子供だからと言って、志乃に絵心があるとは思っていない。だが、とにかく志乃に絵師の世界を見せておきたかった。

「志乃、覚えちゃいないと思うけど、お前の父親は絵師だったんだよ」

玄斎の仕事部屋には紙や絵皿、筆が散らかっていた。それを見た志乃は、ここにこ笑いながら筆を持ちたりして遊びだした。

玄斎は、いつでも良いから遊びにおいでと言った。

玄斎の仕事場は長屋から、そう遠くない所にある。志乃は、一人で遊びに行った。

玄斎は一人暮らし。寂しさを紛らわせるためではないが、志乃が可愛く、志乃が訊くことには何でも優しく教えた。

志乃が十歳になった時だ。志乃が急に真顔になって吾平に言った。

「絵師になりたい」

広いお江戸とは言え、女の絵師など居ない。それに勘齋の後を継げるとも思っていない。だが、吾平は志乃の好きにさせた。

絵師で食べていけるはずはないが、ま、良いではないか、いずれ商人か職人の嫁になるだろう。

何年か経ったある日、玄斎が吾平のところに来た。

「吾平さん、志乃だが…… ひよっとすると、ものなるかも知れんよ。どうかな、

本気で修行させたいが」

「ものになるとは、金を稼げるということかな」

「版元次第だが、赤本や黒本などの草双紙くさごしであれば…… そうだな二、三年も経てば描けるようになる。だが、志乃の絵には、そのような読本の挿絵だけではなく、もっと広いものがある。男であれば良かったが……」

「そうですか。手に技を持つに越したことはないが、絵師とはね……。ま、いいでしょう。玄斎さんにお任せしましょう」

ここで玄斎が、落ち着かない素振りを見せ始めた。

「吾平さん、言い難いのだが、ついては……」

「何ですか。遠慮せずにごってください」

「月謝を貰えれば助かるのだが」

「月謝っ！ 志乃から月謝をとると言うのですか」

玄斎、頭を掻きながら、

「実は苦しくてなあ」

吾平は、金にうるさい。それに玄斎と志乃の父親は仕事仲間であったはず。額に皺を寄せ、腕組みをして考え込んでいた吾平が口を開いた。

「腹藏なく聞きますが、それほど…… 苦しいのですか」

「お恥ずかしい限り。実は、小金欲しさに危あやな絵ゑに手を出しましてな。これが版元
に知れ、当分の間だが、敷居を跨またげん状態ですて」

「……判りました、で、月謝は」

「此処の寺子屋は、月八十文と聞いています。同じでどうかと……」

「いいでしょう」

この日から、志乃に対する玄斎の態度が変わった。

志乃が玄斎のところから泣いて帰ってくるのが度々あった。吾平が聞くと、玄斎はかなり厳しい手ほどきをしているらしい。

「志乃、では止めるか」

「いえ、続けます」

あれから三年。志乃は、十七歳になっていた。

玄斎の口利きで、志乃は版元淀屋から草双紙の注文を受け、曲がりなりにも独立した日々を送れるようになっていた。今は、両親が住んでいた一部屋を借りている。もちろん店賃も自分で払っている。

志乃の隣りには鶴たちが住んでいる。子供が大好きな夫婦だが、ついに子供はできずじまい。仲は良いのだが、一抹の寂しさを漂わせている。

「あんた、あの時、志乃さんを養子にしておけば良かったね」

「なに言ってるやがる。子供ができるできないは、お天道様が決めることよ。だからと言って、今更そんなことを言ってる何になる。これでいいんだよ。今じゃお隣さんとして仲良くやってんじやねえか。親子となりやーこうはいかねえ。これでいいんだよ」

八五郎は、腕の良い大工の棟梁である。

夏のある日、志乃が井戸に水を汲みに行くと、半次郎が体を拭いていた。そういえば、もう五ツ半頃だと言うのに寺子たちの声が聞こえない。志乃は、寺子たちが元気に素読する声を聴くのが好きだった。

「あら、今日はお勉強、お休みなんですか」

志乃が、半次郎に声を掛けることなど滅多にない。

「今朝は気に入った草花を摘んで来いと言ってあります。もうすぐ帰ってくるでしょう」

「草花をどうするのですか。あつ、押し花ではないですか」

「押し花ですか。悪くないな。描かせた後で押し花にしましょう」

「えっ、子供たちに花を描かせるのですか」

「筆遣いのためです。私には絵心がありませんが……。あつ、そう言えば志乃さんは絵師でしたね。これは迂闊うかつだった。今日、お時間はありますか。子供たちに……

……。いや突然、このようなこと失礼しました」

志乃は、草双紙の挿絵も楽しい仕事と思っているが、やはり色絵が描きたかった。仕事の合間を見つけては草木の絵をよく描いている。いずれこの様な絵が売れば良いが……。

長屋の連中は半次郎を先生と呼ぶ。寺子屋は評判が良かった。読み書き、そろばんは勿論だが、それ以外にも寺子が求める学問を教えた。半次郎は温厚な男だが、寺子に対する躰は厳しかった。親たちは皆仕事を持っている。半次郎に預けておけば手が掛からないだけでなく、為になる学問や躰をしてくれる。中には月謝を払えない寺子もいたが半次郎はとやかく言わなかった。半次郎にとり、月八百文の店賃は辛い。月謝のほとんどが店賃に消えていくこともある。だが嬉しいことに、特別な勉強を求める大店の親たちは、月謝以外にも手当てを弾んだ。

「宜しいですよ。では、お昼過ぎに伺います」

「そうですか。助かります。子供たちも喜ぶでしょう。いつも私の講義ばかりで飽きています」

半次郎は志乃よりも十歳ほど年上のはずである。羽織袴姿で脇差を差し、常に礼儀正しい。だが、何故浪人になったのかなど、過去について知っている者はいなかった。そういえば、半次郎は外出する時にも刀を差さず脇差だけである。

寺子たちは目を輝かせて志乃の話を聞いた。志乃が筆を取り、さーっと茎を描いた。これだけで、部屋中にわーっと歓声が上がった。志乃の方が恥ずかしくなるほどだ。いつも部屋に籠り一人で草双紙を描いているが、この日は気分が明るくなるようであった。

寺子屋は八ツに終る。寺子たちは部屋を掃除して帰っていった。

志乃は改めて半次郎の家の中を見回した。奥の部屋には、何の本であろうか、うず高く積まれている。それに見たこともないような道具も置いてある。

「志乃さん、たまにで構わないんですが、お手伝いいただけますか」

「ええ、私も楽しかったです」

半次郎は、何やら次の言葉を搜しているような様子である。志乃は黙っていた。

——何を言いたいのだろう。

「実は、手間賃ですが……」

志乃が急に笑い出した。

「まあ、そんな事でしたの。こちらも気分を変えられますし、子供に教えるのって楽しい。来るなど言われても、お手伝いに来させていただけますよ」

半次郎と面と向かって話をしたのは初めてである。痩せていると思っていたが、逞しい体付き。月代さかきや顎鬚あごひげは綺麗に剃り、髪は後ろで束ねて下げている。老けていると思っていたが、これも違った。整った顔付きは、すっきりしてとして目が清々しかった。

「何度言ったら判るんだ。この盆暗がっ！」

珍しく八五郎が大声を上げて怒っている。お鶴の声も聞こえた。

「あなた、そんなに怒ったら佐吉が可哀想でしょう。鉋かんなを一日研がなかっただけじゃないかい」

佐吉は、八五郎が可愛がっている弟子である。

「馬鹿野郎。傍から余計なことを言うんじゃないやねえ。道具はな、大工にとって命の次に大切なものだ。使ったら必ず研ぐもんだ。次の仕事に対する心構えと同じよ。氣い入れてねえ証拠だ」

「あんた、あたしに向かって馬鹿野郎なんて、随分な口を利くね。あたしや、野郎じゃないよ。女だよ。言うんだったら馬鹿女郎と言ったらどうだい」

口ではお鶴に構わない。これで八五郎の小言は終る。

佐吉は、指物師の次男坊だった。親は稼業を遣れと言ったが、俺はでかいものを作りてえ、大工になりてえと、普段は大人しい佐吉が言い張った。親は仕方なく八五郎の所に連れてきたのだ。八五郎は佐吉を見込みがある男と思っている。だからであるか、矢鱈と口うるさい。だが、佐吉は棟梁、棟梁と片時も傍を離れずに仕事を盗んでいる。職人の親方は、一々弟子に技を教えたりはしない。弟子にとり、自分の腕を磨けるかどうかは、如何に仕事を盗むかに掛かっている。

ある朝、今度は、吾平が表で怒鳴っていた。長屋の連中も氣になり表に顔を出した。

「松吉、今月は月番だろう。廁の掃除をしていないが、どうしたんだい。ゴミも整理していない。駄目じゃないか」

「へえ、済みません。ちよっと仕事が入り込んでしまいました。手が離せなかったもので」

「この長屋に住む以上、言い訳は聞きたくないね。皆、ちゃんと遣ってるんだから。そりゃ、この長屋は古いよ。口の悪いやつらは貧乏長屋なんて言う。だがね、塵一つ落ちていない長屋とも言われているんだ。すぐ遣っておくれ」

松吉は眠そうな目を擦りながら、頭を掻き掻き外に出てきた。松吉が廁の掃除を始めると、吾平が後ろに立って見張っている。

廁もゴミ捨て場も金を生む場所である。吾平は、汚すなどもっての外と思っている。反故などが捨ててであると、誰が捨てたと一軒一軒に聞いて廻る。

「何度言ったら判るんだい。いいかい、紙切れ一枚でも捨てちゃー駄目だよ。ちゃんと紙屑買いが来るんだから」

松吉は、仕事に籠ることが多く、店子たちとも余り話をしない。陰気な感じの若者である。結構腕は良いらしく、問屋がちよくちよく顔を出している。だが、どのような飾り物を作っているのか店子たちは知らない。

(一)

そんな松吉の家に、小粋な様子の女が訪ねて来た。見れば中年増。長旅だったようで伽半きはんも汚れ、着物には埃が付いている。戸を開けた松吉はびっくりした顔をしたが、すぐに女を家に入れた。

しばらくすると松吉と女が吾平の家の戸を叩いた。着の身着のまま江戸に来たのであろうか、着替えてはいない。

「そうですね。松吉の親戚の方ですか。川越から……それは大変でしたね。ご不幸があったとはご愁傷さまでです。ちょうど良かった。一軒空いています。そこで良ければお貸ししますよ。えーと、小浜さんでしたね」

小浜は、松吉の向かい側の家に住むことになった。普段、長屋の連中とは滅多に話をしない松吉だが、一軒一軒に小浜を紹介した。

「まあ、旦那さんがお亡くなりになったんですか」
「いえね、急な病気でコロツと逝っちゃいました。松吉は甥っ子なんですけど、物心付くと俺は江戸に行くとして出て行きました。姉が死んだ時も戻らなかつたんですよ。しょうがない子供だと思っていたんですが、あたしがこうなってみると頼るのは松吉だけ。人生、どうなるか判りません」

お鶴は、聞きながら涙を溜めている。このような話を聞くといつも涙を流す。

志乃の家に入ると、小浜はいろいろと話し出した。

「菖蒲しょうぶなんか生きていますよだね。志乃さん、あなた人間は描かないのかい。これだけ描けるんだ。描いてみなさいよ」

初対面だと言うのに捌さばけた話しっぷりだ。松吉は土間に立って黙っている。

「そうですね、いずれと思っと思っていますが」

「いずれねえ。志乃さん若いうちだよ、いろいろ遣ってみるのは」

松吉と小浜が半次郎の家に行くと、半次郎は教えている最中であつた。小浜は入り口で、

「小浜です。宜しく」

と頭を下げてただけだつた。

小浜が住みだしてから、長屋は賑やかになつた。小浜のどことなく垢抜けた身のこなしや気風の良さは、辰巳芸者を思わせたし、伝法でんぽうな口のきき方は周りに張りのある雰囲気を与えていた。

小浜は朝が早い。起きるとお稲荷さんに手を合わせ、井戸端で米を研ぐ。そこに志乃やお鶴が加わる。松吉は自分で米を研ぎ飯を作っていたのだが、小浜が来てから井戸端に顔を見せなくなつていた。どうやら小浜と共に食事をとっているらしい。

井戸端でのお喋りが終われば、長屋の其処此処から米を炊く匂いや、魚を焼く煙が出てくる。そして、八五郎は、行ってくるぜと道具箱を肩に背負い、威勢良く家を出て行く。松吉の家からは金槌たがねを叩く音が聴こえ、五ツ前後になれば、半次郎の家に寺子が集り、ワイワイガヤガヤと黄色い声を上げ出す。半次郎の食事は、寺子が順繰りに持つてくる事になつている。こうして吾平長屋の一日が始まる。

吾平だが、自分で食事を作ることはない。大抵が屋台の蕎麦か握り鮎で済ませる。たまにだが、弁当を買ってきて家で喰うこともある。雨の日などは面倒だと飯を抜くこともある。総てにきちんとしている吾平なのだが、食事だけは不規則だつた。いつも吾平に小言を言われっぱなしのお鶴は、ここぞとばかりに言った。

「吾平さん、駄目じゃないですか。きちんと食べなければ」

「お鶴さん、判っておりますよ。ただ胃の府が言うことを聞かん。こればかりは私も

「どうしようもない」

と言っておきながら、お鶴がお裾分けを持ってくるとペロツと平らげてしまう。要するに飯を作るのが面倒なのだ。

小浜は、どういう訳か長屋の外には出なかった。たまに出歩くにしても夕方である。しかも必ず松吉と一緒にだった。仕事もしていないようだ。

お鶴などは佐吉がいるのも構わずに八五郎に言う。

「いいご身分だね。旦那が残したんだよ。あやかりたいね」

「てやんでえ。こちとら江戸っ子よ。宵越しの銭なんか持たねえ。やだね田舎もんは。銭を眺めてニヤニヤしてるんだ。気持ち悪いったらねえや。なー、佐吉。そうだろう」

「へえ、棟梁の言う通りで」

「佐吉、いいんだよ。好きなこと言って。この人、あたしには月に一両ちよつとしか渡さないんだよ。いくら下戸の棟梁って言われていても結構良い手間賃取ってるんだよ。わたしや知ってるんだからね。佐吉だって、この人からちゃんと貰ってるんだろう」

「へえ、仲間うちからも羨ましがられています」

「松吉つ、余計なことを言うんじゃないよ。鶴に渡してみる、酒に化けるだけじゃねえか」

「あんた、そんなこと言っているのかい。子供もいないんだ。酒ぐらいいいじゃないか」

お鶴は、すぐに泣く。実際、八五郎の仲間賃は良かった。八五郎は、宵越しの銭なんかと粋がつてはいるが、自分にもしもの事があってはと、恋女房お鶴のために金を貯めていた。

お鶴たちが言い合っていると、

「宜しいですか」

と志乃の声がした。佐吉が戸を開けると志乃が手に井を持って立っていた。

「お裾分けです。おしたしを作りましたので……。あら、お鶴さん、泣いてるんです

か」

「この人が、あたしのことを呑ん兵衛だって……」

「あら、違うかしら」

お鶴が泣きやんだ。

「あーそうでしょうとも。どうせ、私は呑ん兵衛ですよ。子供がない寂しさなんか志乃さんには判りませんよ」

と言いながら急に真顔になった。

「志乃さんもそろそろ見つけなきゃね。あんた、誰か居ないのかい」

泣いてたことなどすっかり忘れている。確かに志乃も、自分にそのような時が来るとは思っている。だが、焦る気持ちなどは全くなかった。

「ねえ、小浜さんだけど……先生とお似合いな歳だと思わないかい。でも……先生は娶る気持ちなんかないみたいだしねえ。結構見栄えが良いのに女遊びもしないらしいよ。世の中、勿体ないことが多いね」

志乃は笑って聞いていたが、すぐにお鉢が廻ってくる。

「あんたも同じだよ。女らしくなったのに。志乃さん、あんた綺麗になったよ」

確かに志乃は綺麗になっていた。色白で細面。目鼻立ちもはっきりしている。ぼつとりとした唇や、ほど良い肉付きの体付きは男心をくすぐる。しかし、言い寄る男はいないし、志乃も興味を抱くような男に出会ってはいなかった。

(三)

江戸は夏を迎えていた。

長屋でも戸を開け放ち、すだれ簾をかけて風を呼んだ。夕方ともなれば蚊遣粉かやりこの匂いが路地に流れる。

小浜が長屋に来てから半年ほどが経った。小浜は、すっかり長屋に溶け込んでいた。店子たちの挨拶は、今日も暑いねえになっていたが、相変わらずの毎日。変わったことと言えば、志乃の仕事であった。

版元淀屋は、志乃が描いた草木の絵を表具屋に見せた。絵を見た表具屋は飛びつい

た。草木の描かれた襖絵を思い付いたので。淀屋は志乃に言った。

「志乃さん、そう言うことなんだけどどうする。ただし条件があるよ。襖屋の仕事よりも淀屋の仕事を優先する。これでどうだい」

志乃は嬉しかった。

襖絵とは言っても、予め唐紙や襖紙に絵を描くのではなく、仕立てた襖に絵を描くのである。襖屋の目論見もくろみは当たった。大店や武家屋敷から多くの注文が入った。

志乃は、自分の部屋に襖を持ち込んでもらったり、屋敷に行って絵を描いた。羽振りの良い大店などは季節ごとに襖を替えた。

小浜は、相変わらず人間を描けと言っている。志乃は、寺子たちを描いたことがある。志乃は、その絵を小浜に見せたが、小浜は、にこつと笑い可愛いねえと言った。

「志乃さん、男でも女でも構わない。大人を描きなさいよ。ただ変な絵は止めなよ」

変な絵と言われても、志乃には判らない。大人を描いてみたいとは思うが、どうも感ずるものがない。子供は可愛い。見ていれば自然と描きたいとの思いが出てくるが、大人にはそのような感情が湧いてこない。

暑い朝だった。

志乃は、家中の戸を開け放ち、庭に咲く朝顔を写生していた。襖絵に使うつもりだ。ふと、入り口に人の気配を感じて振り向くと、小浜が立っていた。明るい日差しの中に立つ小浜の顔は輝いて見えた。それに程よい肉付きの体に衣紋えもんを抜いた浴衣の姿。志乃は、小浜を綺麗だと思った。

「ちよいと良いかい」

小浜は、そう言いながら部屋に上がってきた。朝顔の絵を見ているが、何やら顔付きが厳しい。志乃は気になったが筆を止めなかった。

「志乃さん、くだいようだけど、まだ大人を描く気にならないのかい」

「……草花を見ると可憐で愛おしいと思います。子供は愛らしく可愛いと思います。そういう時に描きたくなります。でも大人には……」

小浜は、じーっと志乃を見ていたが口を開いた。

「あんた……まだ、知らないね」

「えっ！」

志乃は、その言葉が意味する事をすぐに理解した。理解した途端、何故か顔が赤くなり俯いてしまった。小浜は、障子を閉めるよと言いながら、さっさと動いた。風の流が止まった。部屋の中は暑くなっていった。見ると小浜は後ろを向き、帯を解きだしている。驚いて見ている志乃の前で、小浜の浴衣が落ちた。

「あっ！」

志乃は思わず声を上げた。背中一面に色鮮やかな緋牡丹ひぼたんの刺青いれずみがあった。小浜は、顔だけを志乃に向けた。

「驚いたかい。つべこべ余計な事を訊いちや駄目だよ。描いて欲しいんだ、あんなに。いずれ、花は萎しぼんで枯れちゃうからね」

志乃は、銭湯でもこれほど綺麗な刺青を見たことがない。

——綺麗……。でも、花は、いずれは萎んで枯れる……

「今すぐにでも描いて欲しいんだけど…… その前に教えたいことがあるんだ。あんたも裸におなりよ」

志乃は、何がなんだか判らなくなっていた。ただ呆けたように小浜を見ていた。小浜は志乃を立たせ、帯を解いて浴衣を脱がせた。志乃は恥ずかしかった。女の証を知ってから、自分の裸を他人に見せたことなどない。

小浜は、大きな目で志乃の体を上から下へと見ている。志乃は、見られているだけなのだが何やらくすぐられれているような気持ちになり、真っ赤になった。

「綺麗な体だねえ。いいかい、よく聞くんだよ。此処に居るのは小浜じゃない。いいね」

志乃は、小浜じゃないと言われても意味が判らない。返事もせずにいると、小浜は志乃の目を閉じさせた。志乃は怖い気持ちもあったが、小浜が何をしようとしているのか、何となく気付いていた。

志乃は、胸に小浜の手を感じた。立っているのが辛い。志乃の体から力が抜けていった。志乃は、ゆっくりと畳みの上に崩れた。小浜の手と体が横たわる自分を包んでいる。志乃は目を閉じて、されるがままでいた。

生まれて初めて知る感覚であった。

「さっ、目を開けてごらん」

目の前に汗に光る小浜の体があった。志乃は体を動かそうと思ったが力が入らない。

「勘違いしちやいけないよ。あんたに思いがあるからしたんじゃない。あんたが女だつてことを教えたかっただけなんだからね。何か判ったかい」

志乃は、何かと言われ困ったが、思わず頷いた。

——女つて……

小浜は優しい顔になっていた。

「ふふ、女つていいもんだろう。あんたは優しい男と一緒になつて欲しいよ」

小浜は、あんたは、と言った。

「女絵師……。粹じゃないか。羨ましいよ」

小浜は、そう言いながら志乃の体に浴衣を掛け、自分も浴衣を着た。

「明日、また来るけど……。もしも、その気になったら描いてくれるかい。障子を締め切るから、あんたも暑いと思うけどね」

小浜は、土間の方に体を向けたが、

「あつ、背中のは、人に話しちや駄目だよ」

と言いつ残して出ていった。

志乃は、じっとしていたが、ふーっと笑みがこぼれてくるのが判った。そして、浴衣を着て障子を開け放なった。部屋の中に風が流れこんできた。

志乃は、清々しさを感じていた。

翌朝、志乃は、部屋を綺麗にして半紙と絵皿、筆を用意した。

辺りが明るくなりだした頃、小浜が来た。二人は目を合わせ、ニコツと笑った。志乃は、人の目が届かない程度の隙間を残して障子を締めた。少しだが風は通る。

もう言葉はいらない。小浜が浴衣を脱いだ。志乃は改めて小浜の体を見た。

——これが大人の女……

起伏のあるふくよかな肉置きししお。たっぷりとした乳房は勢いがあり、体を動かすと

重たく揺れる。

志乃は、昨日の感触を思い出した。

——描きたい！

この思いが体の底から湧き出てきた。身震いする思いだ。だが、気になることがあった。綺麗な肌に青痣あおあざのような痕がある。

「小浜さん、痣が……」

「つべこべ聞いちゃ駄目って言ったらろう。痣を描くかどうかは、あんたに任せるよ」

志乃は、小浜を庭に面した障子の前に横座りさせた。背中をこちら側にして右手は畳につけている。志乃は、改めて小浜の背中を見た。薄っすらと汗に包まれた緋牡丹が綺麗に咲いている。まるで、志乃に挑みかかるような様子だ。

「小浜さん」

声を掛けた。

「えっ！」

小浜は、顔だけを志乃の方に向けた。

「そのまま……。小浜さん、動かないで欲しいんだけど、意識すると体に力が入ります。それとない感じで居てくれますか」

「志乃さん、あんた顔も描くのかい。背中だけでいいんだよ」

「描くのは私です。つべこべ余計な事を言わないでください」

「ふふ、判ったよ」

志乃は、何枚も下絵を描いた。二人は無言だった。志乃の筆は流れるように動いている。あれほど描く気が起きなかったのに……。志乃は夢中になって描いた。右の脇から重い乳房が顔を見せている。志乃は筆を動かしながらクスツと笑った。そしてつぶやいた。小浜さん、ありがとう。

既に九ツは過ぎていたはずだ。描き出してから三時ほどが経つ。

「小浜さん、疲れたでしょう。終わりましょう」

小浜は部屋中に散らばった下絵を見た。凄い数だ。

「しかしまー、随分描いたもんだねえ」

「ええ、小浜さんで、余りにも綺麗だから。これを元に仕上げます。大きさは三尺四方。描くのは仕事の合間になりますから…… 結構、日数は掛かります」

「何日でもいいよ。ところで手間賃だけど、遠慮なく言っておくれ」

「ふふ、小浜さんからは、昨日、お金よりもっと大切なものをいただきましたから」

「ふふ…… 判ったよ。志乃さん、あたしも嬉しい」

このような時に限って仕事が舞い込む。小浜の絵は、ほぼ描き上がっているが、志乃は、細かな所に筆を入れたかった。後四、五日は掛かりそうだ。

(四)

夜中の五ツ頃、長屋に叫び声が上がった。小浜の家らしい。

半次郎と八五郎が路地に飛び出した。見ると黒装束に身を包んだ者が厠の方に走って行く。黒装束は三人。半次郎と八五郎が追い掛けたが、三人は扉を乗り越えて逃げた。店子たちが小浜の部屋に入った。小浜は俯せに倒れている。お鶴が小浜を抱いた。小浜に怪我はないようだがブルブル震えている。これ程の騒ぎなのに松吉の顔が見えない。吾平は、松吉の家を覗いたが、松吉はいなかった。吾平は、小浜に優しく声を掛けた。

「小浜さん大丈夫かい。物盗りかも知れんな。今夜はあたしの所に居なさい。八五郎、済まんが、自身番に知らせてくれないか」

吾平は、いたわるようにして小浜を自分の部屋に連れていった。

小浜と二人になると訊いた。

「さっきは、物盗りと言ったが、裏長屋に黒装束の者が押し込むことなど滅多にない事だよ。何か事情があるのかい」

小浜は、いえ別にと言うだけだった。

志乃とお鶴が、お茶を入れましょうと部屋に上がった。だが、さすがのお鶴も何を

話して良いか判らない。

すでに四ツを過ぎてはいるはず。木戸は四ツに閉まるが、松吉は戻ってこない。吾平の部屋に張り詰めた空気が漂っていた。

戸を叩く者がいる。志乃が立ち上がり、戸を開けた。

見れば、半羽織姿で朱房しゆぼうの十手を持った侍が立っている。侍が静かな声で言った。

「大家の吾平はいるかい」

吾平は、別に慌てることもなく、ゆっくりと立ち上がって土間に降りた。

「へえへえ、吾平はあたしですが」

「拙者、南町奉行所同心、神田右近と申す。この男だが、おぬしの店子ではないか」

右近が後ろを向き、顎をしゃくった。後ろから岡っ引きの勇造が男を負ぶったまま前に出た。勇造が男を腕に抱き変えて部屋に入ってきた。

「松吉っ！」

大声を上げたのは小浜だった。

松吉はかまちに寝かされたが、血だらけ。辛うじて息をしている状態だ。小浜が、

「寝ている松吉を抱いた。右近が言った。

「大丈夫だ。暴行を受けたようだが死ぬことはない。後で傷口を洗ってやれ。ところで先ほど押し込みがあったと知らせが入ったが……小浜とは、おぬしか。松吉とはどのような間柄じゃ」

小浜が、甥っ子ですと小声でつぶやいた。

右近が話した。

「自身番が木戸を閉めてすぐの事、松吉がふらつきながら木戸まで来た。どう見ても逃げてきた様子。自身番は、松吉を知っている。金は盗まれたかと訊けば、頭を横に振るだけ。ただ、暴行を受けたのであれば、拙者が出張ることもないが、同じ長屋の店子が同じ日に被害に合った。何か事情があるのではと思ひ出張でばったが。どのようなじゃ。おぬしたちが事情を話し、訴えを起こせば良し。起こさぬのであれば、拙者として動く訳にはいかん。如何する」

小浜と松吉が顔を合わせた。小浜が言った。

「お役目ご苦労さまです。神田様、これはたまたま二人が同じ日に被害に合っただけでございませう。物を盗られた訳でもなし。事情をと申されましても……何もございませんが」

右近は、じーつと小浜を見ている。

「そうか。相判った」

右近は、勇造に、おいと言ひ、さっさと帰ってしまつた。

松吉は自分の部屋に寝かされた。傷は大したことはない。だが、打ち身が酷いのか歩くことが出来ない。

翌日、小浜は志乃に医者頼んだ。医者は、左の脛の骨に罅ひびが入っている。治るには十日から二十日掛かるだろうと言つた。小浜は、医者の話を聞き終わると吾平の家に行った。

「大家さん、皆さんには優しくしていただいたのにご迷惑をお掛けいたしました。松吉が歩けるようになりましたら、二人で引越します」

「なにも引越すことはないでしょう。ただの物盗りと暴漢だ。小浜さん、あたしや、水臭いのは嫌いだよ」

この言葉を聞いた小浜は、下を向きながら、いえ、ご迷惑がと言つて黙つた。しばらくして、吾平は、半次郎の所に行き何やら話をした。

志乃は、小浜の絵を完成できないでいた。

——先日の騒ぎ……

心に動揺があるのだろうかと思つたが、今は落ち着いている。

——後、少しなのに……

と自分に吹き、筆を持って絵に向かうが手が動かないのである。筆は、ピクリとも動かない。志乃は、何故なのか理由が判らなかつた。

——何が邪魔をしているのか…… あっ！ 背中あきの痣……

小浜は、松吉を介抱していた。

「叔母さん、またあいつらが来ます。叔母さんだけ逃げてください」

「なに言ってんだよ。馬鹿なこと考えないで、早く治りますよ。お天道様にお願ひするんだよ。あたしはお稲荷さんにお願ひしてるからね。お天道様とお稲荷さんにお願ひすれば早く治るよ。脛で良かった。腕だったら仕事に関わるところだったね」

「……やはり叔母さんは逃げた方がいい。もう、俺を襲うことはないよ」

「判ったような口を利くんじやないよ。いいかい、あいつらは、あたしの居場所を知ってたんだよ。変じやないか。松吉を襲う必要ななかったんだよ。あいつら、なんか言ってなかったかい」

「……」

「松吉、身内はおまえだけだよ。何でも話しておくれよ。寂しいじやないか」

「……あの女の身内はおまえだけだそうだな。匿かくまったそうじやねえか。許せねえ

……」

「それごらん。……あたしのせいでおまえにも迷惑を……。悪かったね」

「叔母さん、俺はそんな方には考えちゃいねえ。頭なんか下げないでくれよ」

「さ、早く治して、一緒に何処かに行こうよ」

(五)

数日が経った。長屋はいつも通りの毎日に戻りつつあった。

そんな中で、半次郎が押入れから埃だらけの刀袋を取り出していた。埃を払い、袋帯を解いて刀を出した。番指拵ばんさしこしら。えの刀。目貫めぬきは、竹に変わっているが、元は金無垢であったはずだ。これだけ立派な拵えの刀……

半次郎が、右手で柄つかを、左手で鞘さやを持って静かに刀を抜いた。刀を立てて表を自分の方に向け、じっと見ている。次に裏を見た。刃切れや刃毀れはない。長く手入れをしていなかったが錆も浮いていない。

半次郎は、使わないで済めば良いかと呟きながら、打ち粉を叩いて紙で拭いた。左手で刀を立て陽にかざした。銘は直信なおのぶ。直刃すくはで細身の綺麗な刀だ。

—— 昔は世話になったな……

丁寧ちやうじゆに丁子油を塗り、鞆に戻した。

志乃は小浜が心配であった。

親しくなったつもりだったが、小浜は昔のことを一切、話してくれない。川越から来たと言う。元は芸妓だったのではないかと勝手に考えていたが、緋牡丹の刺青。それに幾つもの痣。芸妓であれば刺青など入れない。小浜には何かある。背中の中は人には話すなど言った。考えれば考えるほど、思いは暗い方に向かっていく。

志乃は、版元淀屋に行ったついでに葛餅くすもちを買い、それを持って松吉の家に行った。

「志乃です。宜しいですか」

中から小浜の声がした。

「どうぞ、入っていいよ」

志乃が松吉の家の上がるのは初めてだった。松吉は、左足を投げ出して座っていた。二人に目を遣ったが表情は暗い。志乃の顔付きも厳しくなる。

「どうしたんだい、志乃さん。お通夜つやじゃないんだよ。そんな顔して」

「済みません。松吉さんにお見舞いと思って……」

志乃は葛餅を出した。

「あら、氣い遣わしちゃったね。三人で食べようか」

小浜は立ち上がり、茶筌ちせんから皿を用意している。

志乃は、部屋を見回した。綺麗に整理された道具類が仕事台に置いてある。それにも掛けてある。松吉の仕事振りを髻ほづかとさせる。志乃は、同じ職人として、このように道具類を大切にする松吉を知り、嬉しかった。

「なんだい今度は、にこにこ顔かい。あんたは、ころころ変わるね」

「だって、道具類が綺麗に……」

その時、松吉が笑った。志乃は松吉の笑顔を初めて見た。誰と顔を合わせても、挨拶は頭を下げるだけ。無表情で話をしない松吉には、あのお喋りなお鶴も声を掛けない。

「松吉さんも笑うことがあるのね」

小浜が急に笑いだした。

「松吉はね、良い腕なのにまだ自信がないのよ。仕事に打ちこみ過ぎなの。頭の中は仕事だけ。せつかくお江戸で問屋さんに可愛がられるようになったというのに……」

「えっ！ 小浜さん、それはどう言うことなんですか」

小浜は、いけないと言ふような顔をして話を変えた。

「絵は、まだなのかい」

「済みません。もうちよつとなんです、筆が動かなくて……」

「いろいろあったからね。あんな事がなければねえ。驚かせちゃったね。でもそろそろ描き上げて欲しいんだけど」

志乃は、返事をしなかった。刺青とか事件のことが頭の中でぐるぐる廻っていた。

「忘れると言つても無理だろうけど、今回のことはあんたには関係ないことなんだよ。余計なことは考えなくておくれ。いいね」

志乃は、頷く以外になかった。

志乃はお米を研ごうと思い、井戸端に行った。まだ誰も来ていない。研いでいると松吉が路地をゆつくりと歩いてきた。

「あら、松吉さん、歩けるようになったんですね。良かった」

松吉は頭を掻きながら井戸端にきた。見ているとお稻荷さんに手を合せている。

「葛餅、美味しかったです。あのー、小浜叔母さんの絵を描いているんですか。どんな絵なんですか」

小浜は話していないようだ。志乃は、話そうかと思ったが止めた。

「内緒。松吉さん、もうすぐ仕上がりますから、小浜さんに見せて貰ってくださいな。松吉さん、もう仕事は始めたんですか」

松吉は、頭を横に振り、ではと言つて家の方に歩いていった。

お鶴が来た。井戸端に座ると、ぷーんと酒の匂いがした。

「お鶴さん、匂いますよ」

「いいんだよ。亭主の奴、でかい仕事を請け負ったらしくて泊まり込み。もう何日も帰ってこないんだから。佐吉も佐吉だよ。顔も見せやしない。そりゃ、男は仕事だからね。あたしや構わないけどね」

お鶴たちは、良く夫婦喧嘩もするが、聞けば噴出しそうな事が原因だ。犬も喰わぬとは良く言ったものだなどと志乃も呆れてしまうことが多い。

「志乃さん、大きな声では言えないけどね、小浜さんのこと、どう思う」

「どうって……」

「変じゃないか、身内同士が襲われるなんてさ。あたしは何かあると思うね。小浜さんは、小粋で気風もいい。あたしは好きなんだけど、川越で何やってたのかも話さない。志乃さん、あんた何か聞いてないかい」

志乃の頭に緋牡丹や痣が浮かんだ。

——誰かに話せば、小浜さんを助けることができるかも知れない……

そうとも思うが、判断が付かなかった。

「別に、何も……」

「そうかい。小浜さんたち、また襲われるんじゃないかとあたしは気になるんだけどね。神田という同心は、そうかって言って帰っちゃったけどね。小浜さんも何か事情があるんだったらお上に話した方がいいんだよ。あんたも寝る時は、戸締りをきちんとした方がいいよ」

お鶴の言う通りであった。志乃も、また襲われるのではと考えていた。

(六)

「叔母さん、走るのは無理だけど、俺の脚はもう大丈夫だ」

「本当だね。あたしはすぐにでも身支度できる。おまえも道具類をまとめいた方がいいよ。明日か明後日にでも出ようね」

この日、小浜は吾平に店賃を清算した。引越すと言う小浜を、吾平は引き止めようとはしなかった。

「小浜さん、長屋の連中には挨拶をするのかい」

「大家さんの方から伝えていただけますか。夜逃げするようで気が引けますが……。
どうかお願いします」

小浜は、豊に頭を擦り付けて頼んだ。吾平は判りましたと言った。

次の日の夕暮れ、小浜と松吉が身支度を整え、夜が来るのを待っていた。

「松吉、五ツ頃出るからね。もっと遅い方がいいんだけど、木戸が閉まるからね。足は大丈夫だね。道具類は二つに分けたね。一つはあたしが背負うから」

「済みません。足は大丈夫です。叔母さん、遠くに行きましょう」

「そう、遠くにね」

二人は、小田原に行くつもりだった。

薄い月明かりのなか、二人は長屋を出た。

夜っぴいて歩けば、日の出までには戸塚辺りまで行けるはずだ。松吉は大丈夫と言っていたが、やはり足を引きずっている。

二人は、旅行灯たびあんどんを持っていたが、江戸を遠く離れるまでは目立たないようにと灯していない。小浜は、必死になって歩く松吉を可哀相だと思った。小浜は、涙しながら歩いた。

——仕方なかったんだ。仕方なかったんだよ。松吉、おまえまで巻き込んだりしてご免ね。でも、仕方なかったんだ。

小浜は、同じことを何遍も頭の中で繰り返した。

あと半里ほどで品川宿というところに差し掛かった。辺りには家もなく、寂しい道が続く。街道を逸れないようにと、二人は下を見て歩いていった。

突然、バタバタバタと、人が駆け寄る音がした。二人は、ギクツと振り返った。五、六人の男がこっちに向かっていてる。

「松吉、走るんだよッ！」

「叔母さん、何処かに隠れた方がいい」

二人は手を取り合って茂みに身を隠そうとした。

「おっと待ちねえ。今更、隠れようたって無駄な足掻あがきよ」

二人は、六人の男に取り囲まれた。着流しに一本差し。顔は隠していない。小浜は男たちを見た。知っている男ばかりであった。

「やっと捕まえたぜ。姐さん、苦勞させやがって。此処で殺つても悪くはねえがな、それじゃー、俺たちの腹の虫が収まらねえ。安中^{あんなか}までお連れしやすぜ。おいっ、二人をふん縛れっ！」

男たちが二人に手を掛けようとしたその時、

ハックション！

少し離れたところで大きくしゃみ。男たちは振り返った。月明かりに照らされて、ポーっと侍が立っているのが見えた。その侍が近づいて来た。

「女、子供相手に六人か。大袈裟なことだ。さっ、手を離せ」

小浜と松吉は、その侍を見た。

そこに立っていたのは、あの半次郎だった。既に、襷^{たすき}を掛けている。

——しくじったな。もっと早く追いつくべきだった。肝心な時に風邪を引くとは…

…。いかなな、熱がありそうだ。意識が朦朧^{もうろう}とする。

半次郎は、早足で二人を追いかけたつもりだったが来るのが遅かった。案の定、男の一人が小浜の首に腕を回し、刀を喉に突き付けている。松吉は、まだ足が利かないらしく、へたり込んでいる。

「浪人風情が一人で何を粹がっていやがる。一步でも動いてみる、小浜の命はなくなるぜ。さあ、退きやがれ」

「おぬしらであれば、拙者一人で充分」

と言った途端、ヒューツと音がした。と同時に、ギャーツと叫び声。

小浜に刀を突き付けていた男が目を押さえた。指の間から血が噴き出している。その男がぶっ倒れた。半次郎が、小柄を投げたのだ。

「小浜、逃げる！」

半次郎の声を聞き、小浜は松吉の手を取って走り出した。だが、松吉は走れなかった。男四人が刀を抜き、半次郎を取り囲んだ。そして一人が小浜たちを追った。

その時、呼子が聞こえ、凄惨な形相で二人の男が走ってきた。

「神妙にしる。南町奉行所同心神田右近だっ！」

勇造も居る。威勢が良い名乗りではあったが、二人ともゼイゼイ言っている。

「右近殿か。助かった。小浜たちを頼む」

勇造が小浜たちを追った。半次郎と右近は、背中合わせになり四人に対した。

「右近殿、勇造一人で大丈夫か！」

「あいつは目潰しめつぶを使う。凄い効き目だ。心配はない。ところでおぬしは寺子屋の先生、刀など遣えるのか」

「お二人さん、なに戯言を言ってるんだいよ！二人一緒に冥土に送ってやらー。おいっ！ 殺っちまえ」

四人は、右手に刀をだらつと持ち、機会を窺うかがっている。やくざ特有の喧嘩剣法だ。半次郎と右近は、少しづつ離れていった。この方が闘い易い。

遠くから、ギャーツと叫び声が上がった。

「半次郎殿、勇造だ。一人は終わったぞ。ところで、こいつら掛かってこんな。こちらから行くでしょう」

言うなり、右近は一人に斬り掛かっていった。もの凄いい切っ先だ。もう一人が右近の背後から斬り掛けた。右近は、これを読んでいた。振り向きざま、男を斬り下げた。

男は右肩から斬り裂かれた。

半次郎は、まだ二人と対峙したまま刀を交まじえていない。右近の相手を見ると、わなわなと震えている。そこに勇造が戻ってきた。

「どうした」

「へえ、ふん縛ふんばくってあります」

勇造はそう言うなり、右近の相手に何か粉のような物を投げつけた。男は叫び声を上げ、地面をのたうち廻まわった。右近が半次郎を見た。

「半次郎殿、助太刀は！」

「無用じゃ！」

二人の男が同時に半次郎に斬り掛かった。半次郎は、左膝を地面に付けたかと思うと刀を右上に斬り上げた。一人が腹を裂かれた。と同時に半次郎は、さっと立ち上がり、刀を右八双に持っていく、もう一人を袈裟懸けに斬り倒した。

流れるような刀遣い。目の覚めるような腕だ。

「おぬし、読み書きそろばんだけじゃと思っておったが…… 遣るな」

「いやー、何年振りかで刀を遣った。ハツクシヨン！ 実はな、怖かったのじや」

二人は顔を見合わせ、大声で笑った。やくざ二人は、生き証人である。

帰りの道すがら、右近は半次郎に昔は何をやっていたのか訊いた。

半次郎は、ある藩で吟味ぎんみよりき与力きりきだったと言う。右近は、同心である。幕府と藩の違いはあるが、位から言えば半次郎の方が上になる。

半次郎は吟味役であり本来、捕り物には関わる必要はなかったのだが、腕が良かったためよく引つ張り出された。幾つもの手柄を挙げ、周りからも一目置かれる存在であった。だが、半次郎は喜びを感じない。

—— どうも、このような仕事、拙者には向いておらん。

半次郎は、とにかく本を読むのが好きであった。藩内を歩いていても、珍しい植物などを見つけると、日暮れまで飽かず観察する事が多かった。

「おい見ろよ、与力の半さん。また遣ってるよ」

「腕も良いが……。あー言うのを学究肌と言うのかのう」

「妻も妻らずに……。よう飽きませず……」

—— 周りの者たちも半次郎の学問好きを認めていた。

—— 私は、自由に学問が出来る道を選びたい。

家を継ぐつもりもなく、独り身である。半次郎は、奉行にお役ご免の申し出をした。奉行は、かなり難色を示したが、半次郎の頑固さを知っていた。半次郎は、浪人の身となり、江戸に出て来た。

話しを聞いた右近が、

「で、半次郎殿、今の暮らしは……」

半次郎は、今の寺子屋生活に満足していると言った。

「だが、半次郎、よくも小浜を見つけれられたな」

「甚平に頼まれたのだ。見張ってくれとな。耄碌もろくしているようで、あの吾平はしっ

かりしている。昼は寺子屋、夜は見張り。寝不足が続いてな。お陰で風邪を引いてしまった」

と言い、また、ハックション！ と馬鹿でかいクシヤミをした。半次郎が鼻を嚙りながら右近に言った。

「奉行所も遣るな」

「当たり前じゃ。勇造の子分に張らせていたのよ。小浜め、何の事情もないなどと。拙者の目は節穴ではないわ」

神田右近は、八丁堀に小体な屋敷を構えている。敷地は、七十坪ほど。妻の絹代と女中の喜和と三人暮らしである。子供はいない。

右近は、ほっそりとした体躯で上背があり、半羽織姿に朱房の十手が良く似合った。切れ長な目。涼しげな面持ち。訴えを聞く時も、捜査をする時も、出合いの時も表情一つ変えずに淡々と仕事をこなす。滅多に笑うこともなければ表情を変えることもない。何日しか、能面右近などと渾名あだなされていた。しかし、同心とは下級武士であり、扶持も少ない。謂わば貧乏なのである。そうであっても、岡っ引きや下っ引きに手当てを渡さなくてはならない。喜和がぼやく。

「奥様、旦那様ですけど、外でお会いしてもチラツツと見るだけなんですよ」

「いいじゃないか、家にいる時は違うんだから」

右近は、外では颯爽と着物の裾をなびかせて役者のように歩くが、家に入ると全くの別人になった。まず、絹代と一緒にいる時であるが、顔は緩みっ放し。

「鬼子母神様のほおづき市と浅草寺の朝顔市に鉢植えを出します。これで何がしかの費えを補えます」

「如何にも。拙者、絹代の才覚には敬服しておる」

「なにが敬服ですか。そうやってダラダラしているのでしたら、鉢植えを整えるとか…… 水遣りをするとか、遣る事は沢山あるのではないですか。貴方！」

この貴方！ の声音如何によって、右近の動作が決まる。高い声であれば笑っていいれば良い。だが、低い声の場合は、即、行動を起さなければならない。右近は、絹代に頭が上らない。

南町奉行所に連れて行かれたやくざ二人の口から、思わぬ事が話された。南町奉行は、安中の奉行所に、同心の一人を送った。三日後、同心が戻ったが、やくざの話は事実だった。

お白州に小浜と松吉がいた。吟味筋の厳しい取り調べが行なわれた。半次郎は、関係者として、総ての調べに同席させられた。

数日後、お裁きが下った。

小浜は、情状酌量の余地あり。依って遠島えんとうの刑。松吉はお咎めなし。小浜は、二カ月後に流人船るにんせんに乗せられることになった。

半次郎の部屋に志乃がいた。志乃は、描き終えた小浜の絵を半次郎に見せている。「小浜さんから…… そうだったのですか。綺麗な絵だ。小伝馬町に行けば、小浜さんに渡すことは出来るが……」

「半次郎様、小浜さんの事をお聞かせください。それによって、この絵をどうするか決めます」

半次郎は志乃に語った。

小浜は、安中に住んでいた。川越と言ったのは身を隠すための嘘だった。

小浜は、真面目に小料理屋の仲居を遣っていたが、器量と気風の良さが災いし、やくざの親分、駒吉に見込まれてしまった。小浜は、やくざなどは嫌いであり駒吉の事など何とも思っていないかった。だが、駒吉は小料理屋に通い続けた。

やくざは、二足の草鞋を履く。駒吉は、市中取締りの役も担っていたが、その腕は大したものだった。揉め事があっても、その場に駒吉が顔を見せれば、双方とも、「親分にお越しいたくほどの事はありません」

と頭を掻き、背中を丸めて立ち去るほどであった。

小浜は、そんな駒吉の姿を見るうちに絆ほどされたことも手伝い惚れてしまった。二人は夫婦になったが、小浜は駒吉が裏表のある酷い男である事を知らなかった。

外面は、度胸の据わった親分。しかし、家に入ると酒浸りのいじけた男でしかなか

った。小浜を思い通りにしたい。その姿は、駄々を捏ねる子供と同じであった。爪を切ってくれ、背中を搔いてくれ、体を洗ってくれ……。惚れた弱みではないが、小浜は何でも駒吉の言う通りにした。駄々っ子は望みが叶うと、益々、駄々を捏ねる。

ある日、駒吉は小浜に刺青を彫れと言った。小浜は、親から貰った大事な体。針を刺すなど、嫌だと言った。

「馬鹿言うんじゃないよ。しみつたれた店の仲居だったお前を、大親分の女将さんにしたのは、何処の誰だい。俺じゃねえか。良いよ、元に戻りたいんだったら、何日でも戻してやるよ。だがな、俺を嫌な気分にした奴は、どう言う理由か知らねえが、皆、あの世に行っちゃうんだな。寶巻すまきにされて川を流れて行った奴もいたな」

小浜は、ゾツとしたが、

—— 良いじゃないか。惚れた男が、あれほど言うんだ。と痛みに堪えた。

小浜は、どうせ消すことが出来ない緋牡丹であれば、思いつ切り愛でようと思つた。

ところが、駒吉は、小浜に賭場の壺振りをやれと言った。

「出来ねえだど！」

駒吉は小浜を殴った。駒吉が、小浜に壺振りをさせたのは儲けのためだけではなく。小浜を、そして緋牡丹の刺青を見せびらかしたかったのだ。これも駄々っ子と同じである。

小浜は肩肌を脱ぎ、賽さいを振った。緋牡丹小浜は、安中中で有名になった。整った顔立ち、男好きのする体つき。小浜に色目をつかう博徒はくどが増えていった。小浜は、伝法でんぼうな言葉を使い、姉御のように振舞った。男を足蹴あしげにすることもあった。

—— こんな事……。あたしじゃない。でも、言い寄る男を避けるためには仕方ない……

問題は、駒吉であった。壺振りをさせたのは自分でありながら、駒吉は博徒たちの艶目に嫉妬あつした。しかし、今更、小浜に壺振りを止めさせる訳にはいかなかった。小浜が居なくなれば、賭場が寂れるのは目に見えていた。

駒吉は酒を呑むと、小浜をいびり始めた。

「壺を振るだけで良いんだよ。お前は、盆に居る奴らに目を遣るがな、見なくていいんだよ。奴ら、お前が艶目を使ったと思ううじゃねえか。お前は、俺の女なんだよ」

駒吉は、暴力を振るいだした。殴る蹴るの毎日。

ある夜、ぐでんぐでんに酔った駒吉がドスを振り回しだした。小浜の胸倉を掴み、ドスを真上に持っていった。小浜は駒吉の顔を見たが、狂ったとしか考えられなかった。駒吉がドスを振り下ろした。小浜は駒吉の手首を掴んだ。二人は揉み合いになった。

気付くと駒吉の胸にドスが刺さっていた。小浜は、恐ろしくなり逃げようとした。

だが、逃げるには金が要ると気付き、部屋にあった金を掻き集めた。何処に逃げようかと考えたが、むしろ人が多い方が身を隠せる。思い出したのは、江戸に居る甥の松吉だった。

殺しと盗み。本来であれば死罪だが、小浜の証言、安中の奉行所の話から、小浜の情状が酌量された。

「半次郎様、船は何処から……」

れいがんじま

「靈岸島 だそうだ」

えいたいはし

「永代橋 であれば戻ることはない。

「良かった。では、恩赦の時には……」

「如何にも。何年後かは判りませんが、小浜さんのことだ、病にも懼らず必ず戻ってくるでしょう」

二人は見つめたまま語り合った。

志乃は、何故かは理解できなかったが、小浜に教えてもらったあの感覚に似たものを半次郎に感じていた。

良く晴れた日だった。風も穏やかに流れている。

靈岸島には見送りをする何人もの人たちがいた。その中に志乃も半次郎もいた。いや長屋の連中、全員がいた。吾平は皺くちゃな顔に涙を幾筋も流し、水っ漬を流したまままで遠くを見ている。お鶴も居る。

「志乃さん、聞いておくれよ。うちの亭主ったら、辛すぎて見送れないって言うんだよ。男のくせに情ないったりやありやしない」

そう言いながら、オイオイ声を上げて泣いている。
止めどなく涙を流しているのは松吉だった。

半次郎が、ふと、後ろの方に目をやると着流し姿の右近がいた。半次郎は、人垣を分けて右近に近付いた。

「わざわざ小吉の見送り……」

「人間とは辛いものよ。己の思いとは別に、相手次第で幸せにも不幸にもなる。だが、どうであれ、罪を犯せば償わなくてはならん。小吉……戻れば良いが」

「相手次第…… そう言うものかも知れませんな。ところで着流しとは非番ですか」

「ん、まーな。年がら年中お役目ばかりでは、体が持たん。許しを得て参った」

「家でのんびりすれば良いものを優しいお方だ。許しとはお奉行の……」

「いや、妻だ」

「はっ、奥様の…… それはどういう事ですか。良く判りませんが」

能面右近の表情が変わった。

「判らんでも良いではないか。おぬしには関わりのないこと」

「私は、学問に打ち込んでおります。学問とは、道理や筋道を解き明かすもの。スツキリしないことがありますと、余計に知りたくありません」

「半次郎殿、拙者と妻の事にとやかく口を挟むものではない。良いではないか拙者が、妻の尻に敷かれていようが」

右近は、ハツとして表情を戻したが、もう遅い。

「尻に……。つまり御妻女に頭が上がりません……。非番の日、奥様の許しを得なければ外に出る事もできない。と言うことになりますな。先ほど、何事も相手次第と申されていたが…… 詳しく知りたいものです」

能面右近、情けない顔になった。

「話しても判らんだろう。それほどまでに申すのであれば、構わん、拙宅に来ればよい」

「いや、有難き幸せ。いずれお邪魔致します」

苦虫を潰したような顔の右近。興味津々、目を輝かせた半次郎。

そうこうしているうちに、ギー、ギーつと、艀るを漕ぐ音が聴こえてきた。流人たちは品川沖に停泊する本船まで、はしけで送られる。

はしけの屋形やかたがゆつくりと姿を見せた。人垣の動きが激しくなった。

志乃は、懸命に小浜を捜した。

居た。背筋を伸ばし、屹度きつと、沖の方を見据えた小浜がいた。

「小浜さーん。小浜さーん！」

志乃は大声で叫んだ。小浜が顔をこちらに向けた。遠目にもくつきりと映える小浜の顔。小浜が志乃に気付いた。小浜が、にこっと笑った。

志乃は、手にしていた小浜の絵を両手で広げ、上に掲げた。

小浜の目が大きく開かれた。そして、その目から大粒の涙が零れ落ちた。

小浜の絵に、あの痣は描かれていない。

「小浜さーん、待ってますよー。この絵、渡しますからー」

志乃の目にも涙があった。

半歩離れたところに、そんな志乃を優しく見守る半次郎の目があった。

(了)

譚
綴

「女絵師 志乃」

二〇〇四年九月八日

編集・発行者 エムツー・プラデオ
三谷 弘

M²pladeo
Planning & Design Office

Copyright©Mitani2005

禁無断転載・複写